

本研究の目的は、晩年のミシェル・アンリの「キリスト教の哲学」が、キリスト教の聖書の章句と彼自身の現象学とを照合するような形式をとっていることの意義を解明することである。そして、本研究が明らかにしたのは、このような形式を取ることによって、「キリスト教の哲学」が、この哲学によって顕にされる〈真理〉を、アンリ自身に体得させるだけでなく、読者にも伝達するという哲学的実践になっている、ということである。

「キリスト教の哲学」は、ヨハネ文書を中心とする聖書の章句とアンリ自身の現象学とを照合するかのような形式で展開されるため、現象学による聖書解釈のようにもみえる。しかし、アンリ自身は、自分の思索が聖書解釈ではなく、あくまで哲学であり、聖書が顕にしている「キリスト教の〈真理〉」と同じ〈真理〉を別の仕方でも顕にしている、と主張する。

それでは、「キリスト教の哲学」の論述形式には、哲学としていかなる意義や必然性があるのだろうか。この点について、先行研究は十分に解明できていないように思われる。図式的に分類すると、先行研究は「キリスト教の哲学」を二つの仕方でも捉えている。第一に、哲学に軸足を置く研究者たちは、「キリスト教の哲学」を純粋な哲学的体系として捉えようとする。そのために彼らは、初期から晩年に至るアンリ哲学の連続性や差異を解明する通時的研究によって、「キリスト教の哲学」を哲学的に捉え直す。その結果、彼らは「キリスト教の哲学」から聖書のことばやキリスト教的な概念を極力排除して、純粋に哲学的な体系を抽出する。第二に、主に神学に軸足を置く研究者たちは、「キリスト教の哲学」をキリスト教の現象学的な解釈と捉えて、アンリの現象学を新たな神学体系の構築に活用しようとする。これら二つの捉え方はどちらも、「キリスト教の哲学」が取った論述形式の意義や必然性を解明せず、むしろこの形式を解体して、哲学ないしは神学に還元してしまう。

それに対し、本研究は次の二つの方法をとった。第一の方法は、上記の「哲学に軸足を置く」研究者に学びつつ、アンリ哲学を通時的に捉えることである。ただし、本研究は、このような把握によって、「キリスト教の哲学」からキリスト教的な諸要素を排除するのではない。本研究はむしろ、初期の厳密な現象学的体系から「キリスト教の哲学」の論述形式へと至ったことに哲学的な連続性と必然性があることを示し、晩年の思想がキリスト教に目覚めたアンリによるキリスト教解釈ではないことを明らかにした（第1章第2節～第4章）。

第二の方法は、上記のような初期から晩年にかけてのアンリの思想的な展開と、彼自身の体験や思想（家）の再発見を機縁として生じた彼の実存的な変容との関係性を示すことである。たしかにアンリの思想は純粋に「哲学」を志向している。しかし、アンリ哲学の展開と、アンリ自身の実存的な変容とはかなり深く結びついている。本研究では、アンリの伝記的な事実と彼の思想展開との関係を示すとともに（第1章第1節）、彼が展開させてきた哲学的な内容、とりわけ「実践」に関する理論と、実際に彼が哲学を営むという実践とが深く結びついていることを示した（第5章第1、2節）。アンリの哲学的展開は、実はアンリが人生の中で経験した諸実践や実存的変容によって推し進められており、とりわけ「キリスト教の哲学」においては、理論的内容とアンリ自身の哲学的な実践とが深く結びついているのである。この結びつきのうちに「キリスト教の哲

学」の形式の意義も見出せることを明らかにした。つまり、「キリスト教の哲学」とは、聖書の章句とアンリの現象学を照合するという哲学的な実践なのであり、この実践を通してアンリは、自らが見出した真理を体得するとともに、他者にその真理を伝達しようとする。この真理の体得と、真理の他者への伝達を可能にする形式こそが、アンリにとっては「キリスト教の哲学」の形式だったのである（第5章第3、4節）。

以下、本研究の議論を略述する。

最初に、第1章第1節において、アンリの哲学の背景にある伝記的な事実と彼の哲学的変遷との関係を検討した。すなわち、対談記事などを手がかりに、アンリがさまざまな思想や出来事に出会う中でアンリ自身の実存が変容したこと、そしてこの実存の変容と彼の哲学の変遷との間にある程度の対応関係があることを示した。

実は、「キリスト教の哲学」以前と以後のアンリの思想にはある程度の連続性が認められる。たとえば、アンリは突然キリスト教に目覚めたわけではなく、「キリスト教の哲学」に至るかなり前からキリスト教を思索の背景にもっていた。また、「キリスト教の哲学」前夜には既にこの哲学の理論的な骨子がほぼできていた。そうであるのに、アンリはキリスト教を「再発見」して自らの実存が変容し、その結果「キリスト教の哲学」の諸著作を書くようになったとさえ述べている。そして、これらの著作においては、聖書からの引用とアンリの現象学とが並置される形式で論じられることになる。

以上のことから、「キリスト教の哲学」という思想の形式に至った背景には、アンリの人生のなかで生じた「再発見」という体験や実践、あるいは、アンリ自身の実存的な変容が深く関わっている可能性を指摘した。

次に、第1章第2節から第4章までで、アンリの思想が変遷していく仕方を通時的に解明した。これらの章で示したことは、①最初期のスピノザ論に萌芽的に含まれていた思想が、初期の思想において、『顕現の本質』の厳格な現象学的体系と『身体哲学と現象学』の身体論という二つの方向に展開されたこと、②これら二つの方向性のうち、『身体哲学と現象学』の思想が中期アンリの思想でさらに展開されたこと、そして、③この中期思想の展開によって、『顕現の本質』の現象学的な体系では十分に解明できない問題が生じたとき、アンリの現象学的体系は「キリスト教の哲学」の体系へと変化したこと、の三点である。これらのことから、「キリスト教の哲学」は、二つの方向性で展開したアンリの思想を発展的に融合するものであり、哲学的展開の一つの終着点であると結論づけた。

具体的に言えば次の通りである。まず、最初期のスピノザ論（「スピノザの幸福」）において、アンリはスピノザの幾何学的体系を、この体系には明示的に現れていないスピノザ自身の幸福の経験や幸福への要求に基づけようとした。このスピノザ論において既に幾何学的体系の現れ方と、この体系の顕現を可能にする幸福の現れ方という二つの現れ方の差異が意識されていたが、この二つの現れ方の関係は明確にされていなかった（第1章第2節）。

この二つの現れ方は、初期の二つの著作において、異なる仕方で整理された。すなわち、初期アンリの主著である『顕現の本質』において、現象が現象することの本質が、表象や理論的体系の現れ方である「超越」と、感情や行為における根源的な自己体験の現れ方である「内在」という二つの顕現様態によって二元論的に分類された。そして、超越的な顕現は内在的な顕現によって可能になるものとされ、内在的な顕現に実在性が認められた。また、超越的な顕現は内在的な

顕現に何ら影響を与えないものとされた（第2章第1節）。

それに対し、メヌ・ド・ピラン論であり身体論でもある『身体の哲学と現象学』では、「超越」と「内在」という二つの分類を堅持しつつも、身体論という枠組みを生かして内在的顕現を細かく分析した。すなわち、アンリは内在的な顕現を、自己体験を実現する根源的なはたらきとしての「主観的身体」と、この自己体験がはたらく場あるいは実質であるところの「抵抗する連続」とが一体的になっているものと捉え、この一体的なものから、諸力能の総体である「有機的身体」と、諸力能が行使されるところの「絶対的抵抗」の二つが立ち現れてくる、と分析した（第2章第2節）。

このような内在的顕現の詳細な分析を、中期のアンリはさらに展開させていく。すなわちアンリは、マルクスやカンディンスキーを論じるなかで、「主観的身体」と「抵抗する連続」の概念を展開させた。すなわち、諸物に働きかけ、生産物や絵画を生み出すなかで、自らの力能を増大させていこうとする根源的な「生の力」の概念と、この「生の力」が働きかける「生-の-世界」の概念へと展開させた（第3章第1節）。

このような思想の展開の結果、中期のアンリは『顕現の本質』の枠組みでは捉えられない事態を扱うことになった。一つは、『実質的現象学』において他者関係を論じる際に登場した「生の〈基底〉」あるいは「生の共同体」の概念である。他者の問題は現象学における難問の一つであるが、アンリは他者の内在的で実在的な顕現に到達する可能性を、自らの生と他者の生の双方を可能にする「生の〈基底〉」のうちに見出した。しかし、『顕現の本質』の枠組みでは、この生の〈基底〉を現象学的に規定することができなかった（第3章第2節）。

もう一つは、『共産主義から資本主義へ』で論じられる「生の自己否定」である。この著作でアンリは、超越的な顕現が、内在的な生の自己否定を促すという形で、内在的な顕現に対して間接的に影響を与えることを明らかにした。このことは、超越から内在への関係性はないとする『顕現の本質』と真っ向から対立する（第3章第3節）。

このように、『身体の哲学と現象学』から中期アンリに至って展開したアンリの思想が『顕現の本質』の二元論的な枠組みのうちに取りまきらなくなったとき、「キリスト教の哲学」が登場し、アンリの思想の枠組みが根本的に変化した。すなわち、内在という顕現様態が人間の生の自己体験と絶対的〈生〉の自己-産出に二分され、人間の生の顕現を可能にする絶対的〈生〉が想定されることになった。「キリスト教の哲学」は、すべての人間の生を可能にする絶対的〈生〉の一元論の様相を呈することになった（第4章第1節）。

このような絶対的〈生〉の想定によって問題になってくるのは「超越論的エゴイズム」である。根源的な自己体験によって自らを顕現させる人間の生は、自己自身しか実在的に体験することができないため、絶対的〈生〉を原理的に覚知できない。では、アンリは、なぜ絶対的〈生〉について語りうるのか。アンリはこの「超越論的エゴイズム」を、実践において絶対的〈生〉の自己-産出の過程と一体化することによって克服できると考えている。すなわち、キリストのことばを真に聴き取ったときに、絶対的〈生〉の自己-産出の過程によって成就する行為、つまり、人間の我意によるのではない行為が人間のうちに生じる。このとき、人間の生は絶対的〈生〉の自己-産出の過程に一体化し、絶対的〈生〉を覚知するという（第4章第2節）。そして、この一体化において生ける者たちの生の共同体、「キリストの神秘体」が形成され、この共同性のうちで真に実在的な他者との関係も可能になる（第4章第3節）。

しかし、絶対的〈生〉は、行為や実践において覚知しうるものだとしても、思考や哲学的な論

述によってではその実在性に到達することのできないものである。では、「キリスト教の哲学」は、いかにして絶対的〈生〉に関する〈真理〉を明らかにしているのだろうか。また、絶対的〈生〉の〈真理〉について語るアンリは、いかにしてその〈真理〉を獲得し、読者に伝達することができるのだろうか。

これらの疑問に対し、本研究は、「キリスト教の哲学」を反復的に《書くこと》という哲学的実践が、絶対的〈生〉に関する〈真理〉のアンリ自身の体得と、他者への〈真理〉の伝達を可能にしている、と結論づけた。

まず、中期の著作、『野蛮』において、知の獲得や伝達が「二重の反復」によって可能になると論じられていることを示した。たとえば、他人の行為の仕方の習得は、他人の行為をただ単にまねて、反復的に再現する実践の背後で、その他人が行った際に体験したパトスを自分も反復的に体験することによって可能になる（第5章第1節）。

この「二重の反復」の概念に基づいて「キリスト教の哲学」の形式を省みると、アンリはこの「二重の反復」によって絶対的〈生〉の〈真理〉を自ら習得し、他者に伝えようとしていたことが分かる。

アンリは晩年の3著作で、聖書の章句と自身の現象学とを繰り返し照合することを通して、両者が同じ〈真理〉を顕にしていることを執拗に論じる。たしかに、アンリが明らかにしようとする〈真理〉は言語によって習得したり、伝達したりすることはできない。しかし、アンリはこの照合作業を繰り返すという反復的な実践を通して、《聖書の再読によって自らの実存が変容し、聖書が明らかにする〈真理〉と同じものを現象学的に表現できるようになった》ときに体験したパトスを反復し、この〈真理〉を体得しようとする。さらにアンリは、この照合作業を繰り返し著作に書くという実践を通して、それを読む読者に自らの体験を反復させ、この〈真理〉を伝達しようとする。

したがって、「キリスト教の哲学」には、《アンリがキリスト教を「再発見」して、実存が変容されるほどの衝撃を受けた》という体験を、哲学の重要な構成要素として組み込む必要がある。だからこそ、聖書の章句とアンリ自身の現象学との照合という「キリスト教の哲学」の形式が要請されたのである（第5章第2、3節）。

最後に、西谷啓治の哲学との比較を通して、このような「キリスト教の哲学」が一つの《哲学的実践》になっていることを明らかにした。

西谷の哲学は、哲学以後の宗教的実践の境地から哲学以前の実存的問題へと架橋する哲学的理論であり、いわば宗教実践がもたらしたある種の覚知を、哲学以前、哲学以後の厚みとして哲学のうちに組み込んで、思想的に表現するための《哲学》であった。

それに対しアンリは、一方で自分自身が哲学をしていると認識しているが、他方で生ける者の生と絶対的〈生〉とを結びつける (*re-ligare*) 紐帯を築くという意味での「宗教 (*religio*)」を志向している。「キリスト教の哲学」は、その思想内容を反復的に伝達する実践を通して、読者のうちに絶対的〈生〉との宗教的紐帯を築き、この紐帯を通して宗教的諸実践をともに行う生ける者たちの一種の共同性を開く。そして、このような紐帯を築く限りで、アンリは自らの哲学を一つの「宗教」だと述べている。以上のように、アンリの哲学は、生ける者の生と絶対的〈生〉との紐帯を築くことによって、生ける者同士の共同性を開くような哲学的実践なのである（第5章第4節）。